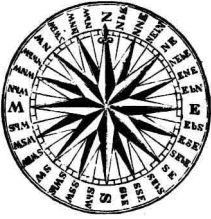


# 昼と夜のあいだ

川村たかし・著  
小林与志・絵

——夜間高校生





偕成社の創作文学

---

## 昼 と 夜 の あ い だ

NDC 913                      偕成社 228P 21cm 1980年

.....  
発行 1980年12月 初版第1刷

---

著 者	かわ	むら	た	か	し
発行者	今	村	村	廣	

---

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

TEL (03) 260-3221(代) 〒162

振替 東京 5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

---

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-720360-0904

©川村たかし 小林与志 1980

---

Printed in Japan

# 昼と夜のあいだ

—夜間高校生

川村たかし 著 / 小林与志 絵



偕成社



全国定時制高校

学校数 公立千二百五校

私立三十四校

合計千二百三十九校

生徒数 定時制十四万六千九百七十三人

通信制十一万六千九百十六人

合計二十六万三千八百八十九人

(昭和五十五年五月調)



# 昼と夜のあいだ／もくじ

第一話	終わりです	7
第二話	宝塚へ <small>たからづか</small>	23
第三話	手紙	43
第四話	うそ	67
第五話	あの男	91
第六話	あし	109
第七話	姉 <small>きょう</small> 妹 <small>まい</small>	133
第八話	おやじ	149
第九話	別れ	175
第十話	はじまり	199
あとがき		223

新しい地平を切り拓ひらいた児童文学〈解説〉

|| 砂田すなだ 弘ひろ





奥付の前に

著者・川村たかし（かわむら たかし）

1931年，奈良県に生まれる。奈良教育大学卒。  
日本児童文学者協会・日本児童文芸家協会会員。  
主な作品には『川に立つ城』『ふんどし校長』『山へいく牛』（国際アンデルセン賞優良作品賞・野間児童文芸賞）『北へ行く旅人たち』『広野の旅人たち』『石狩に立つ虹』（路傍の石文学賞）。住所／奈良県五條市新町2-1-14

画家・小林 与志（こばやし よし）

1925年，東京に生まれる。太平洋美術学校で洋画を学び，60年ごろから装丁・挿絵に活躍をはじめ。児童出版美術家連盟会員。作品に『砂時計』『ぼくがぼくであること』『青春は疑う』『海べの小さな村で』など多数がある。住所／東京都葛飾区東金町1-36-1-1225



第一話  
終わりです



二年生の須田公子が、大里中学校の生徒会長に当選した。

女子の会長は十二年ぶりだという。

応援に力をいれた京田たい子が、

「やっぱり見る者は見とるなあ。こんなええ生徒会長がどこにおるもんですか。」

と、みんなにふれ歩く。

それを聞くと公子は、

「うち、かなわんなあ。」

ちよっとでれて、ひろいおでこのあたりに手をやるのだ。当選したのも意外だったが、たい子のようにべたほめにほめあげられると、あとがおそろしい。そのどっちもふくめて「かなわん」のである。

立候補者は四人あって、うち三人が男子だった。二年F組からだれも立候補しないとあって、公子はむりやりクラスからすいせんされたのである。得票順に会長がひとり、副会長が二名というきまりになっていた。

それが最高得票になった。次点との差は百七十二票もあった。なぜそんなに人気があつたのかどうしてもわからない。だいいち、演説会の日に彼女自身はただ「終わりです」と、たったそれだけいっただけなのだから。

ひとりの持ち時間は二十分間。二十分のあいだに何人の応援が出てもよいことになっていた。時間が切れると、選挙管理委員のほうでチンと鈴を鳴らすという。

「なるべくは、チンで打ち切ってほしいんや。」

と、選挙の竜平が口とがらせていいにきた。

「全部で二時間しかないねん。入場退場にひまかかるとなる。ずるずる延長されたらかなわんねんよ。」

「わかった。そやけど、ちょっとはがまんしてや。聞いてほしいこといっぱいあるもん、なごうなるかもわからへんもの。」

公子の選挙事務長のつもりでいるたい子は、竜平と小学校の同級生であるのをいいことに、くいさがる。

「なあタッペイちゃん、たのむわ。」

「ちょっとってどのくらいや。」

「まあ、そこは二分か三分や。そのかわりこんどタコ焼きおごるって。」

竜平は目玉をむいて、

「あかん。」

と、すげない。

「よりよって選管委員を買収するとはけしからん。」

けれども竜平がさいづち頭をふりふりいってしまふと、

「そやけど、ほかにくらべてあんまりながいのは、有権者のみなさんの反感を買うかもわからへんなあ。」

たい子はこまかいところまで気をつかった。

体育館で応援演説をするのは、一谷由香と南川和美と京田たい子。それに三年生のバレー部長をしている吉野健太郎をひっぱってきた。女ばかりではまずいだらう。それに公子は以前バレー部にはいっていた。これで運動部と三年生の票をいただこうというのである。

来年の秋までの一年間の生徒会長をえらぶというところで、三年生からは立候補していない。いわばこの浮動票をどうあつめるかが、かぎでもあった。

「なあみんな。演壇にあがっても、泣きごとだけはいわんところな。しょうしょうプライベートにふれてもいいから、本当のことをいおうよ。」

と、たい子が提案した。

そこで、「清き一票を」だの「おめぐみください」だの「おわすれなく」だのを禁句とした。

当日になった。

くじびぎで立候補の演説のトップが公子ときまった。候補者である公子自身はいちばんあとでしゃべることにする。これもまた、事務長のたい子が考えた演出だった。

「三年生のおにいさん、おねえさん。それから二年生と一年生のみなさん。」

と、一谷由香はさりだした。まるまるふとった由香は、ほったを赤くしている。しかしあがっているふうではなかった。

「生徒会長に須田公子さんをおねがいます。彼女は身長百六十一センチメートル、体重のほうはえーっと。」

由香はちよっとほったをおさえて、こつちをふりかえった。そんな話をするつもりじゃなかったのに口がすべったという表情だった。

「しもうた」という顔でどぎまぎしていると、

「ええぞオ。どないやあ。」

三年生のやじる声かした。

「おちついてユッカ。」

という声援も聞こえる。由香はまるくふとったからだを机におしつけるようにしてつづけた。

「じつはわたしは小学校でコッコと、いえ須田公子さんと同級でした。そのころわたしはおなじ体重でありました。しかし現在わたしのほうが彼女よりウン、キログラムおおいのであります。体重の話をしますと、わたしの数値にふれなければなりませんので、このことは以上といたしましてハ。」

由香はそこであせをぐいとふいた。

「彼女はごらんになればわかりますように、まことにおでこがひろい。このおでこにすばらしいかしこさを秘めているのであります。それから、いつかわたしが彼女にえりあしがええなあ、色が白いんでひきたつわといいましたら、それをすなおに受けて、つぎの日はショートカットにしてくださいました。」

みんなはどっとわらった。

「歩きかたはそんなにスマートとはいえませんが、すこし右の肩がさがるように見えます。このことは、彼女が会長になってもならなくても、気をつけてもらわなければなりません。」

「どうして。」

と、会場から声がかかった。由香はそっちのほうを見た。



「どうしてって、まっすぐのほうかひよこたんひよこたんしないでいいでしょ。彼女の家はラーメン屋さんなんです。もし卒業してラーメンの屋台をひっぱっても、おつゆがこぼれないですみます。」

由香は覚悟をきめたように、みんなをにらみつけた。

「お父さんが亡くなったのは、小学校三年生のときでした。お母さんが再婚したのは去年のことですから、そのあいだコッコはふたりの弟たちのめんどうをみてきたんです。苦労したはずなのに、知らん顔して勉強もしてきます。このごろはお母ちゃんからだをこわして入院やら退院をくりかえしているのに、にこにこしながら学校に出てきます。」

由香はだんだん早口になったが、そこでふっとため息をついた。

「以上、よけいなこともいいましたが、わたしのいいたいことは、会長をえらぶとしたら、須田公子さんしかいないということです。ちがいますか。」

由香がうしろへさがった。拍手とわらいがおこった。「ちがいますか」と大きな声をだしたのがおかしかった。応援弁士がまるでしかりつけるようなぐあいだった。

候補者の公子はわらいながらちよっと頭をさげた。わらうと目がほそくになった。ショートカットのおでこがいっそう白く見えた。



南川和美はもっていたメモを机の上にひろげて話しはじめた。

「わたしは須田公子さんとは、一年生のときちがう組にいました。毎日出あうわけではありませんが。そのくせ、大きらいでした。なぜかというへとんにつんとすまして、お高くとまっているように見えたからです。組はちがいましたが、実力テストがあるたびに、わたしより上のほうにいるらしいんです。先生ははつきりおしえてくれません、どうもそうらしい。わたしがいくらがんばっても追いつきません。みなさん、こんな腹のたつことってないでしょう。そりや、わたしも勉強のすきなほうとはちがいます。けど、英語の単語テストにしたって、数学にしたって、がんばっても追いつけないやなんて、腹たちます。そんな人をすきになれなくてもあたりまえでしょう。」

「そりや、そりや。」

と、どなる声が聞こえた。

「おまえはだれの応援なんや。」

と、わめく声がしてみんなワツとわらった。和美はながい顔をちよつとかたむけて、べろつとくちびるをなめた。

「そればかりではありません。習字の展覧会というのと、須田公子さんはよく特賞にはいります。準三段というのがまたしやくにさかります。それでいて将来は看護婦さんになるやなんて、もう